

戦火に生きた医師

チェチェン戦争の実情と現実

医師

ハッサン・バイエフさん

チェチェン共和国。

紛争の地として、この国の名を耳にした人は多いだろう。

あるいは、テロが横行している国だと聞いている人もいるかもしれない。

しかし、その実態は正確に伝えられていないようだ。

ロシア国内のメディア統制と、ジャーナリズムの欠如。

そして、日本を始めとして、遠い国の出来事だと無関心を決め込む人々。

——ここに、ひとりのチェチェン人の医師がいる。

名はハッサン・バイエフ。

熾烈をきわめた1994年からのチェチェン戦争において、

首都・グロズヌイで、負傷者の治療にあっていた人だ。

日本のジャーナリストたちの呼びかけで、亡命先のアメリカから来日した。

柔道家でもある、この勇気ある医師が語る、

戦争の実情。医師としての矜持。そして日本への思い——。



●Note●

チェチェン共和国

Chechenskaja Respublika Rossijskoi Federatsii

黒海とカスピ海に囲まれた、北コーカサス地方に位置するロシア連邦内の共和国。先住民族のチェチェン人が住民の多数を占めている。面積は約1万7千平方キロメートル（岩手県とほぼ同じ）。人口は約50万人。首都はグロズヌイ。住民の多くはイスラム教・スンナ派の教えにもとづくスーフィズム（神秘主義）を信仰している。

チェチェン戦争

1859年、チェチェンは当時のロシア帝国に併合されたが、抵抗は絶えず、その度にロシアはチェチェンを武力で弾圧し続けてきた。ソ連崩壊後の1991年、チェチェンは独立を宣言するが、'94年に当時のロシア大統領、ボリス・エリツィンが4万人の連邦軍を派遣し、第一次チェチェン戦争が勃発。8万人近くの死者を出した（うち、民間人は約4万9000人と推定されている）。5年間の停戦のあと、チェチェン武装勢力とロシアとの対立が激化し、'99年、再び連邦軍が進撃。第二次チェチェン戦争が始まり、前回の戦争を上回る連邦軍の攻撃が行われており、犠牲者は25万人を超えた。紛争は現在も継続中。



戦火のもとで手術を行うバイエフさん（左）。医療物資が乏しかったため、傷跡の縫合に、家庭で使う糸を使用したという。



●Profile●

Khassan Baiev

1963年、チェチェン共和国生まれ。'77年、ソ連邦ジュニア柔道大会で優勝。以降、多くの柔道大会で好成績を残す。'85年、クラスノヤルスク医科大学卒業後、モスクワでの生活を経て、'88年、故郷のチェチェンの首都・グロズヌイの病院で優秀な美容形成外科医として知られるようになる。'94年から始まったロシア・チェチェン戦争の状況下で、野戦外科医として、敵味方を区別しない医療活動を行ったため、ロシア連邦軍とチェチェン過激派の両方から命を狙われる。'00年、アメリカに亡命。同年11月、アメリカのNGO「ヒューマンライツ・ウォッチ」より「人権監視者」の称号を受けた。著書に「誓い—チェチェンの戦火を生きたひとりの医師の物語」（アスペクト刊）がある。現在は、NGOチェチェンの子ども達国際委員会・議長を務め、チェチェンの子ども達への医療、支援を行いつつ、形成外科医復帰の可能性を探っている。



NGOチェチェンの子ども達国際委員会
http://www.chechenchildren.org/baiev/baiev_iccc.html

敵味方、分け隔てのない治療は 医師として当然の義務 両親の教育もあと押ししてくれた

— チェチェン戦闘員が私に向かって叫んだ。「そんなやろう（ロシア軍兵士のこと）、ほっといて、死なしちまえ!」。一瞬、わたしもその誘惑にかられた。こんな怪物がいなくなれば、この世界もいくらか住みよくなるだろう。女や子供たちも、もうこいつに暴行されることもない。（中略）もしわたしが人間の生死を決定し始めたら、その行く先はどうなるか？「わたしは医者だ」とわたしは答えた。「患者がどの誰だろうと、その治療をするのが私の義務だ」——

ハッサン・バイエフさんの著書、『誓い』の一場面だ。バイエフさんはチェチェン生まれの外科医。彼は、1994年から始まったロシアとチェチェンの戦争下において、病院に運び込まれた負傷者の治療にあたった。敵味方の分け隔てなく。

「私はグロズヌイの郊外にある病院で、外科医として働いていました。毎日のように大量の負傷者が運ばれてきました。その中には撃たれた敵方の兵士も含まれています」

ロシア軍兵士や将校の中には、チェチェンで採掘される石油の利権に手を染めたり、「掃討作戦の一環」としてチェチェン人の住居に押し入り、財産などを略奪し、暴行を加えるなどの行為を行う者がいるという。

「そうした兵士に怒りは込み上げてきます。しかし、私は医師です。医師はどんな状況でも医師であり続けなければならない。敵も

味方も存在しないのです」

バイエフさんは、医科大学を卒業する際、『ヒポクラテスの誓い』（※1）を受け入れた。いわく『わたしは自己の能力と判断の及ぶ限り、病者の治療に力を尽くします。わたしの治療によっていかなる人を傷つけることも欺くこともいたしません』と。

「なぜ私が『ヒポクラテスの誓い』を守ることができたのか。それは父と母の教育によるものが大きい。チェチェンには苦難の歴史があったからでしょう。私たち子供に、『楽な生活をさせない』『できるだけ自分で困難を解決させる』ように仕向けていました。ですから、いつでも苦難に対する心の準備ができていたのです。

子供の頃、褒められたり甘やかされたりしたことは一度もありませんでしたし、何か誤ったことをすると厳しく罰せられました。そして年長の人や女性には敬いの心を持つように言われました。彼ら彼女らが助けを求めてきたら、必ずその人たちを助けてあげなさい、と」

イスラムの教えと サムライ精神のおかげで 強靱な意志を培うことができた

チェチェン人の多くが、イスラム教にもとづくスーフィズムを信仰しており、バイエフさん自身もイスラム教徒である。イスラムの教えが、自分の意志を強靱なものにしてくれた、とも語る。

「戦争であまりに不正なものを目撃してきたので、別の世界に逃げ込みたいという心境に襲われたこともありました。要するに、死んでしまいたい、ということですよ。しかし、なぜ自殺しなかったかということ、イスラムの教えがあったからです。命の存在を決めるのは全能の神だけ、というのが私たちの教えにあるのです」

その教えを確信したのは、イスラムの聖地、メッカを訪れてからだという。

「第一次チェチェン戦争が終わってから、私はサウジアラビアの知り合いを頼って、メッカ巡礼に行きました。そこで私は、まったく別の人間に成り変わったと思います。頭の中にあるさまざまな悩みや苦痛から解放されて、自分自身が生きたい、何かを作り出したいと思うようになったのです。そして、誰かを助けたい、とも。



誓い—チェチェンの戦火を
生きたひとりの医師の物語
アスペクト 2,800円+税



として、敵味方のどちら側にも立たない。そういう視点でこの本を書きました」

現在バイエフさんは、アメリカでNPO法人を立ち上げ、チェチェンの子供たちを支援する活動を行っている。

「2006年、ようやくチェチェンに帰ることができました。人々を見て胸が痛みました。爆撃の影響で手足のない子供が多く、目や耳に障害を抱えている子も見受けられました。その数は2万人程度いると言われています。そうした子供たちを支援するために、まずは学校の整備をしたいと思っています。戦争で学校や病院はおろか、インフラさえ破壊されている状況ですから」

バイエフさんの支援活動は決して順調ではない。それでも現地の学校へ、少しずつ物資の輸送などを行っていると話す。最後にバイエフさんと握手をした。大きく、温かな手だった。そして意志の強い眼差し。その力の源のひとつに、柔道で培ったものがあるのだろう。この取材のあと、バイエフさんは、念願の講道館での稽古に向かっていった――。

Text by: 植田マサユキ

政治的な意図はまったくない チェチェンの実情を 知ってもらいたいだけ

2000年、心身の疲労が限界に達したバイエフさんは、人権団体の力を得、アメリカに亡命する。そして『誓い』を執筆する。

「本を書いた理由は、戦争で何の罪もない人が犠牲になっていることを公表したかったからです。アメリカや日本のように平和な国でも、さまざまな不満や問題はあります。しかし、それは戦争に比べたらはるかにましだということを知ってほしいのです」

アメリカでも、チェチェン戦争の状況はあまり知られていないという。

「チェチェンの報道はほとんどされていません。目立った事件、たとえばモスクワ劇場占拠事件(※2)などの事件が起きたときだけです。チェチェンはイスラム原理主義と結びついたテロリズム国家だと言われていますが、実際は違います。チェチェンは自国の文化や慣習を妨げない程度にイスラム教を受け入れているだけです。国内にはイスラムのモスク以外にもロシア正教の教会もありますし、宗教的な対立はありません。そういうことはまったく報道されていないといっても過言ではありません」

チェチェンの現状を訴えてはいるが、自分は政治的な発言はしたくない、という。

「というか、政治というものが大嫌いなのです。政治におけるどんな状況にも飲み込まれたくないと思っていますので、できるだけそういう話題を避けるようにしています。私の書いた『誓い』を読んでいただければわかると思いますが、チェチェン人だからチェチェン人の立場で書くのではなく、あくまで医師の立場

やはり信仰がなければ生きていけないと思います。この戦争で、私はさまざまな悲惨な出来事を目撃しました。そうすると『命』というものを考えざるを得ませんし、おのずと信仰に傾いていくわけです。メッカへの巡礼は、その気持ちを確信のあるものに変えてくれたと思います」

チェチェン人としての誇り。そしてイスラムの信仰の力。バイエフさんの医師としての精神力を培ったものは、もうひとつある。それが柔道だ。

「チェチェンでは、強靱な身体を持つことが尊重されるのです。ですから柔道や空手、テコンドーなどが盛んに行われています。私は25年間柔道をやっているのですが、それは子供の頃に、日本を特別な存在として見ていたからだと思います。映画『姿三四郎』(1965年のリメイク版)が『柔道の天才』という題名で上映されて大ヒットしたこともあって、サムライ映画が非常に人気がありました。武士道の伝統がチェチェンの道徳律と似ているからかもしれません。私は柔道を通して、忍耐というものを学びました。

どうも私は日本に恋をしているようです。というのも、私の夢は日本の講道館に行くことだったんです。世界中の柔道家にとって、講道館はイスラムのメッカのようなものですから。日本に来て、それが実現することになって、非常に喜んでます」

アメリカ亡命後、マサチューセッツ州の柔道クラブに所属するバイエフさん(左から4人目)と子供たち。



脚注)

※1 ヒポクラテスの誓い

医師の倫理・任務などを記した宣誓文。ヒポクラテス(B.C.460~377)は古代ギリシアの医者で、「医学の父」と呼ばれている。

※2 モスクワ劇場占拠事件

2002年秋、人気ミュージカル『ノルドオスト』を上演中のモスクワ南郊のドゥブプロフカ文化センターで、チェチェンの武装勢力が、人質922名を取り、ロシア軍のチェチェン撤退を要求した事件。ロシア政府は武装勢力との交渉に応じつつ、特殊部隊による突入を指示し、武装勢力を全員死亡させた。また、突入の際に使用した特殊ガスの影響で、人質129名が中毒死した。